

## ダニエル書 - 第四十八号

預言の解き明かし——聖書解釈におけるハバククの幻、二つの表、そして「常」の奥義の意義

Jeff Pippenger

2024-01-12

ウライ川の幻に示されている知識の増大こそが、最終的にハバククの二枚の板に書き記されたものである。

彼らが再臨の時に当てはまると見なしていた預言とともに織り込まれていたのは、彼らの不確かさと不安の状態に特別に適合した教えであり、今は彼らの理解には暗い事柄も、やがて時が来れば明らかにされると信じて忍耐強く待つよう彼らを励ますものであった。

これらの預言の中には、ハバクク書2章1~4節のものもあった。「私は自分の見張り所に立ち、物見台に身を置き、主が私に何を語られるか、また私が戒められるとき何と答えるべきかを見ようと見張っていよう。すると主は私に答え、言われた。『幻を書き記し、書板の上にはっきりと記せ。読む者が走りながらでも読めるように。というのは、この幻はなお定められた時のためのもので、終わりには語り出し、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れはしない。見よ、高ぶる者の魂は彼の内に正しくない。しかし、義人はその信仰によって生きる。』」

早くも1842年には、この予言に記された「幻を書き、これを読む者が走ることができるように、板の上に明瞭にせよ」という指示が、チャールズ・フィッチに、ダニエル書と黙示録の幻を説明するための予言図の作成を思い立たせていた。この図の刊行は、ハバククによって与えられたその命令の成就であると見なされた。しかしその当時、同じ予言の中に、幻の成就には見かけ上の遅延-「遅延の時」-が示されていることに気づいた者はだれもいなかった。失望ののちには、この聖句が非常に意味深く思われた。「この幻はなお定められた時のためであり、終わりには語り、偽ることはない。たとえ遅れるように見えても、それを待て。必ず来て、遅れることはない。……義人はその信仰によって生きる。」 The Great Controversy, 391, 392.

ハバククの二枚の板は、預言的には二人の証人である。聖書的には、真理を確立するために二人の証人がそろえられなければならない。

しかし、もし彼があなたに耳を貸さないなら、もう一人か二人を連れて行きなさい。二人または三人の証人の口によって、すべての事が確認されるためである。マタイ 18:16.

ハバククの二枚の板（1843年と1850年の先駆者図表）を重ね合わせると、ミラーの夢の宝石であった諸真理が確認される。第一の板に示された1843年の誤りは、第二の板を重ね合わせることで、幻の遅延の時期を確立する。その歴史の象徴的な見張りであったミラーは、自らの歴史をめぐる論争のさなかに、何を語るべきかを問うた。

私は見張りの持ち場に立ち、やぐらに身を置き、彼が私に何と言われるか、また私が戒められるときに何と答えるかを見よう。ハバクク書 2:1

主はミラーに幻を書き記すよう命じ、ミラーは夢の中でその幻を収めた小箱を部屋の中央にあるテーブルの上に置いた。

主は私に答え、こう言われた。「幻を書き記し、それを板にはっきりと記せ。走りながらも読めるように。」ハバクク書 2:2

その後、表は滞留時間と最初の失望を示す。

この幻は、なお定められた時のためのもので、終わりには明らかになり、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。ハバクク書 2:3.

知識の増加（ミラーの宝石）によって生み出される三段階の試験プロセスが次に示される。

見よ、彼の魂は高ぶっており、彼のうちに正しくない。しかし、義人は自分の信仰によって生きる。ハバクク書 2:4.

二種の礼拝者は、ダニエル書第十二章における試練の過程によって明らかにされるだろう。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

ダニエル書の賢い者たちは、信仰によって義とされたマタイ二十五章の賢い乙女たちであり、悪しき者たちは高ぶっていた愚かな乙女たちであった。ミラーの夢の最後に、宝石は十人の乙女のたとえにおける油を表しており、その油はメッセージであった。

神が私たちにお送りになる御告げを受け入れないとき、神は辱められる。こうして私たちは、暗闇にいる者たちに伝えられるために神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を拒むことになる。「見よ、花婿が来る。出て迎えよ」という呼び声が響くとき、聖なる油を受けていないで、キリストの恵みを心に大切にしていなかった者たちは、愚かな乙女のように、主にお会いする備えができていないことに気づくだろう。彼らには自ら油を得る力がなく、その生涯は難破する。レビュー・アンド・ヘラルド、1897年7月20日。

終わりの時には、ミラーの宝石の光は十倍に明るく輝き、「十」という数も「光」もいづれも試しの象徴である。ミラーの夢の結末によって象徴されている終わりの時に、ハバククの板に表された真理の光は人々を試すメッセージをもたらし、それは十人の乙女のたとえにおいては「真夜半の叫び」のメッセージとして示されている。その試しの過程は、ミラー派の歴史における試しの過程の繰り返しである。なぜなら、十人の乙女のたとえは終わりの時に文字どおりそのまま繰り返されるからである。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

十は試練の象徴であり、十日が終わったとき、ダニエルとその三人の者は、バビロンの食物を食べていた者たちよりも、見た目に色艶がよく、肉付きもよかった。ハバクク書に描かれている高慢な者は、信仰ではなく思い上がりによって生き、バビロンの性質を身につけた。ミラー派の歴史において彼らはバビロンの娘たちとなり、またハバクク書では、信仰によって生きることを選ばなかった者たちの性格を見分けるために、教皇制の預言的特質が用いられている。

見よ、高ぶる者の魂は彼のうちにまっすぐではない。しかし、義人はその信仰によって生きる。また、彼は酒のゆえに背き、高ぶる者で、家にとどまらず、その欲望をよみのように広げ、死のように決して満ち足りることがなく、すべての国々を自分のもとに集め、すべての民をもかき集める。これらすべての者は彼に対して譬えを取り上げ、また、嘲りのことわざをもって言わないだろうか。「自分のものではないものを増し加える者に災いあれ。いつまでか、厚い泥を自分に負い込む者にも災いあれ。」突然、あなたを噛む者たちが立ち上がり、あなたを苦しめる者たちが目を覚まさないだろうか。すると、あなたは彼らの戦利品となる。あなたが多くの国々をかすめ奪ったからだ。民の残りの者は皆、あなたをかすめ奪う。人の血のゆえに、また、地と町と、その中に住むすべての者に対する暴虐のゆえに。ハバクク書 2:4-8

マタイ25章の乙女たちに臨んだ試練の過程は、礼拝者の一群を生み出す。彼らは、北の王（教皇権）、すなわち「多くの国々を略奪した」権力の品性を培ってきた。イゼベルが犬に食われたように、不意に噛みつかれるのは教皇権である。

主はこう言われる。見よ、北の地から民が来る。地の果てから大いなる国が起こされる。彼らは弓と槍を握り、残忍で、憐れみを知らない。その声は海のように轟き、馬に乗り、戦う者として隊列を整え、シオンの娘よ、あなたに向かって来る。私たちはその報せを聞き、私たちの手は弱り、産みの苦しみのような痛みが私たちを捉えた。野に出るな、道を歩くな。敵の剣と恐れが四方にあるからだ。わが民の娘よ、粗布を腰に締め、灰の中で転げ回れ。ひとり子のためにするように喪に服し、最も苦い嘆きをせよ。略奪者がにわかに私たちに襲いかかるからだ。エレミヤ書 6:22-26

ハバククの二つの階級は、信仰によって義とされる者たちと、バビロンの教義を食べ、飲んだ者たちである。ミラーの夢において乙女として表されている終末の時代の人々は、キリストの品性を形成し、その結果、神の印を受けるか、あるいは教皇制の品性を形成して獣の刻印を受ける。

道徳の間のただ中に、真の光が輝くべき時が来た。第三天使のメッセージは、額または手に獣またはその像の刻印を受けることに対して人々に警告しつつ、世界に向けて発せられている。この刻印を受けるとは、獣が下したのと同じ決定に至り、神の言葉に真っ向から反する同じ考えを主張することを意味する。この刻印を受けるすべての者について、神はこう言われる。「その者は、神の怒りのぶどう酒、すなわち薄めら

れることなく神の憤りの杯に注がれたものを飲み、聖なる天使たちと小羊の御前で、火と硫黄によって苦しめられる。」レビュー・アンド・ヘラルド、1897年7月13日。

バビロンのぶどう酒を飲む乙女たちは、ついには神の怒りのぶどう酒を飲むことになる。イザヤ書では、エフライムの酔漢たちは、物事をひっくり返すことによって自らの盲目的な酩酊を露わにし、その行為は「陶器師の粘土」と見なされる。

「the daily」をキリストの象徴と同定することは、「the daily」の真理を根底から覆す。なぜなら、「the daily」はサタンの象徴だからである。「the daily」を異教と同定したミラーの見解は、ハバククの板に直接示されている。神の神殿に座る「罪の人」が現れるために「取り去られた」のは異教であったことを理解させたテサロニケ書の箇所をミラーが発見したことは、第二テサロニケ2章にある主要な真理である。

「さらに読み進めたが、[the daily] が見いだされる別の例は、ダニエル書以外には見つからなかった。そこで私は[コンコーダンスの助けを借りて]それと結びついている語、『取り去る』——『彼は the daily を取り去る』、『the daily が取り去られる時から』など——を取り上げた。さらに読み進め、この箇所についての光は見いだせないのではないかと思っただが、ついにテサロニケ人への第二の手紙 2章7、8節に行き当たった。『というのは、不法の神秘はすでに働いている。ただし、今妨げている者が取り除かれるまで妨げ続ける。そしてそのとき、あの不法の者が現される』等。そしてその聖句に至ったとき、おお、何と真理が明瞭に、しかも栄光に輝いて現れたことか。これだ！ これこそ the daily だ！ さて、ではパウロが『今妨げている者』、すなわち阻む者によって何を意味しているのか。『罪の人』および『不法の者』によっては、教皇制が意味されている。では、教皇制が現されるのを妨げているものは何か。そう、それは異教である。すると、『the daily』は異教を意味していなければならない。-William Miller, Second Advent Manual, 66ページ。」 Advent Review and Sabbath Herald, 1853年1月6日。

ミラーが見出したテサロニケ人への手紙における“the daily”の意味こそが、その箇所の主要な真理である。パウロが真理を愛さない者、したがって強い惑わしを受ける者を指摘しているとき、彼は確かに一般的な意味での真理への憎悪を指摘しているが、その箇所で直接言及されている真理は、“the daily”が異教ローマを表しているという真理である。

体の光は目である。だから、あなたの目が澄んでいれば、あなたの全身は光に満ちる。しかし、あなたの目が悪ければ、あなたの全身は闇に満ちる。だから、もしあなたの内にある光が闇であるなら、その闇はいかに大きいことだろう。だれも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、あるいは一方に忠実に仕え、他方を軽んじることになるからである。あなたがたは神にも富にも仕えることはできない。マタイ 6:22-24。

あるのは真理への愛か、真理への憎しみだけだ。中間はない。マタイ25章の愚かな乙女たちに臨む強い惑わしは、最終的な試練を表すミラーの宝石の光を彼女たちが拒んだことに基づいている。古代イスラエルの最後の試練は第十の試練であり、終わりの時代にはミ

ラーの宝石は十倍明るく輝く。ミラーの宝石を拒むことの象徴が「the daily」であり、アドベンティズムの第三世代においてエフライムの酔いどれどもがそれをひっくり返した。「the daily」は異教のサタンの象徴である。酔いどれどもは背教的プロテスタント主義から持ち込んだ偽の宝石を導入し、それは「the daily」をキリストの象徴だとするものである。

ミラーが自らの宝石について持っていた理解は、彼が育った歴史的背景によって制約されていた。ミラーは、次に起こる預言的な出来事は再臨であると確信しており、1798年に教皇制が負った致命的な傷は、ダニエル書2章における第四にして最後の地上の王国を表すものにほかならないと考えた。ミラーはまた「the daily」の理解にも限界があった。というのも、彼自身の証言によれば、啓示によって特定の研究方法へと導かれ、その方法において彼は聖書とクルーデンのコンコーダンスを用い、いくつかの新聞を読んだ、と述べているからである。そのような方法で学ぶという彼の決断は、ただ心に浮かんだだけのものだった。

私が自然神論者であった十二年間のあいだ、見つけられる歴史書はすべて読んだ。しかし、いまや私は聖書を愛していた。それはイエスについて教えていたのだ！けれども、それでもなお、聖書には私には暗くて理解できない箇所が少なからずあった。1818年か19年のこと、私は友人を訪ねて語り合っていると、その友人は、私が自然神論者だったころの私を知っており、私の話も聞いていた人だったが、いささか意味ありげに、「この聖句やあの聖句をどう思うかね」とたずねた。私が自然神論者だったころに異議を唱えていたあの古い聖句を指してのことだった。私は彼の意図を察して答えた——時間をいただければ、それらが何を意味するかお話ししましょう。「どれくらいの時間が要る？」わかりませんが、必ずお話しします、と私は答えた。神が理解できない啓示をお与えになったとは信じられなかったからである。そこで私は、聖霊が何を意味しているのかを見いだせるはずだと信じ、聖書を学ぶ決心をした。ところが、その決心を固めるやいなや、こういう考えが浮かんだ——もし理解できない箇所に出会ったら、どうするつもりだ？そこで、聖書研究の方法としてこうしようと思いついた。そうした箇所にある言葉を取り上げ、それらの言葉を聖書全体にわたってたどり、この方法で意味を突きとめるのだ。私は『クルーデン・コンコーダンス』を持っていたが、これは世界で最良のものだと私は思っている。そこでそれと聖書を手に取り、机に向かって座り、新聞を少し読むほかは何も読まず、聖書が何を意味しているのかを知ろうと心に決めたのである。アポロス・ヘイル『再臨の手引き』65頁。

ミラーの宝石は、彼の研究方法によって単に見いだされたものではなく、神からの直接の啓示によっても示された。

神は、聖書を信じていなかった一人の農夫の心に働きかけるために御使いを遣わし、彼を預言を探求するよう導かれた。神の御使いたちはその選ばれた者を繰り返し訪れ、彼の思いを導いて、これまで神の民にとって暗く閉ざされていた預言を彼に理解させた。真理の鎖の最初の環が彼に与えられ、彼はさらに導かれて環から環へと探し求め、ついには神の御言葉を驚きと賞賛の念をもって仰ぎ見るに至った。彼はそこに完全な真理の鎖を見た。かつて彼が靈感のないものと見なしていたその御言葉が、今やその美しさと栄光をもって彼の目の前に開かれた。彼は、聖書の一部が別の部分を説明していることを悟り、ある箇所が理解に閉ざされているときには、御言葉の別の

箇所の中にそれを解き明かすものを見いだした。彼は、聖なる神の御言葉を喜びをもって、またこの上ない敬意と畏敬の念をもって受け止めた。Early Writings, 230.

ホワイト姉妹が、神がミラーのもとに「ご自分の御使い」を遣わされたと述べるとき、それはミラーに遣わされた天使がガブリエルであったことを示している。というのも、「ご自分の御使い」という語はガブリエルを指す呼称だからである。

天使の「私はガブリエル、神の御前に立つ者である」という言葉は、彼が天の宮廷において非常に高い栄誉の地位にあることを示している。彼がダニエルにメッセージを携えて来たとき、こう言った。「この事において私を助ける者は、あなたがたの君であるミカエル [キリスト] のほかにはいない。」ダニエル10章21節。黙示録において救い主はガブリエルについて語り、「彼は御使いを遣わして、そのしもべヨハネにこれを示された」と言われた。黙示録1章1節。The Desire of Ages, 99.

ガブリエルとそのほかの天使たちは、ミラーの思いを導き、神の民にはこれまでずっと暗闇に包まれていた預言を彼が理解できるように明らかにするために遣わされた。彼のメッセージは、彼自身の研究方法だけによるものではなく、神の啓示によるものでもあった。彼が聖書を研究するのに用いたその方法自体も、彼の心に与えられたものだった。神が真理を私たちの心に与えられるとき、それは、聖書を正しく解き分ける過程を通して真理に到達することとは対照的に、神の啓示である。ミラーはその両方を行ったが、彼が「the daily」という主題を理解するに至るには、神の啓示が不可欠であった。

ミラーは、ダニエル書8章9～12節に見られる文法上の性の揺れに気づかなかっただろう。というのも、彼の手元にあったのは聖書と、聖書原語に関する情報を一切含まないコンコルダンスだけだったからである。彼は、いずれも「取り去る」と訳される「sur」と「rum」の区別も見分けられなかつただろう。また、いずれも「聖所」と訳される「miqdash」と「qodesh」の違いにも気づかなかっただろう。

彼は、聖書の中に百四回現れる「tamid」という語に関する真理を見出すことはなかつただろう。彼が見ることができなかつた（同時に彼が見た）真理とは、聖書でヘブライ語の「tamid」が用いられている百四回のうち、名詞として用いられているのはダニエル書だけだということである。「tamid」は「絶え間ない」を意味するヘブライ語で、ダニエル書では「the daily」と訳されている。

その語が名詞として用いられているのはダニエル書だけであり、他の九十九回は副詞として用いられている。このため、聖書の他の著者がその語を九十九回も副詞として用いているのに対し、ダニエルがその語を五回も名詞として用いているという事実と直面した欽定訳聖書の翻訳者たちは、証拠の重みによって、ダニエルによるその語の名詞としての用法を訂正せざるを得なかつた。ダニエルを正すために、彼らはその語に「sacrifice」という語を付け加え、こうして名詞を副詞に変えた。そして翻訳者たちを正すために、エレン・ホワイトは靈感を受け、彼女が『「Daily」に関して、「sacrifice」という語は人間の知恵によって補われたものであり、本文に属するものではない。そして主は、その正しい見解を、審判の時の叫びを上げた者たちにお与えになった』と見たことを記録した。

ミラーは、彼自身の証言によれば、“the daily”を理解しようとしており、最終的にはテサロニケ人への第二の手紙の中でそれを理解するに至った。しかしまた、彼自身の証言によれば、語を理解しようとする際には、その語が用いられているすべての箇所を検討したという。そしてその語は、聖書の中でほかに九十九回用いられている。それにもかかわらず、“the daily”に関する彼の証言は、それをダニエル書以外のどこにも見いださなかったというもので、彼はこう述べている。「私は読み進めたが、それ [the daily] が見いだされている他の事例を、ダニエル書以外には見つけることができなかった。」ミラーが宝石へと導かれたのは、彼の研究方法だけによるのではなく、天使の奉仕を通して彼に与えられた神の啓示によるものでもあった。

このため、彼の「the daily」に関する理解は正しかったが、限定的だった。彼は、ダニエル書で「the daily」が5回言及され、そのうち「the daily」が「take away」されるのは3回だが、その3回のうち1回は他の2回とは異なる意味を表していることを認識できなかった。1回はヘブライ語の「rum」とともに用いられ、残りの2回はヘブライ語の「sur」とともに用いられている。両方の語は「take away」と訳されるが、ダニエル書八章十一節では「rum」は「持ち上げて高める」を意味し、十一章三十一節と十二章十一節では「sur」は「取り除く」を意味する。

バビロンの食物を食べ、飲む神学者たちは、物を取り去るにせよ、物を取り上げるにせよ、どちらも一種の除去を表すのだから、両方の語は同じ意味を持つと理解すべきだと主張する。彼らは、「the daily」が三度「taken away」される箇所はいずれも取り去ることを意味すると論じ、そうすることで、ダニエルは語の選択に不注意であったと見なす。彼らはそれを公然とは言わないが、含意として、三つの箇所すべてでダニエルは「sur」という語を用いるべきだったと教える。というのも、神学者たちによれば、「the daily」が「taken away」されるたびに彼が意図したのは毎回同じことだったはずだからである。

彼らは、8章11節から14節において「sanctuary」と訳される「miqdash」と「qodesh」という語についても同じことをしている。これら四つの節のそれぞれにある「sanctuary」への言及は、すべて神の聖所を表すのだと彼らは主張する。その理屈でいけば、ダニエルは三つすべての言及で単に「qodesh」を用い、11節では「miqdash」を用いるべきではなかったことになる。ミラーはそれらの語の区別を認識していなかったが、現代の神学者たちは認識しており、そして認識しながら、区別など認めるべきではないと主張する。それでもなお、語の区別を認識していなかったミラーは、現代の神学者たちとは反対の理解に至った。

事実、ダニエルは極めて慎重な書き手であり、ヘブライ語に通じ、しかも彼ら自身その社会で非常に聡明とされていたバビロンのほかのすべての賢者たちよりも十倍も賢いと評価されていた。ヘブライ語の正しい用法や、その特定の歴史においてどのように正確に表現すべきかを最もよく知っていたのは、まさにダニエルであった。ダニエルが異なる語を用いたのであれば、それは異なる意味を伝えるためであり、彼が意図的にそう表現しようとしたからである。「sanctuary」や「take away」と訳される語に関するダニエルの独自の用法が認められるなら、それらは「the d

aily」に対するミラーの理解を裏づける。そしてその理解は、パウロが真理を憎む者は強い感わしを受ける運命にあると指摘するまさにその箇所、ミラー自身によって認識されたものである。

真理を憎み、強い感わしをもたらす偽りを信じる者たちは、二つの階級で表されるエフラムの酪酊者としても描かれている。一方は学識ある指導層であり、もう一方は無学な一般信徒で、学識者が彼らに教えることしか聞こうとしない者たちである。彼らは偽りの下に身を隠し、死と契約を結ぶ者たちである。彼らはハバクク書2章で魂が高ぶっている者たちであり、マタイ25章の愚かな乙女たちである。彼らはミラーの夢に関する基礎的な真理を拒む者たちであり、その真理は終わりにおいて十倍も明るく輝く（現代イスラエルに対する第十で最後の試練を表している）。これは、古代イスラエルに対する第十で最後の試練によって象徴されているとおりである。

次回の記事でこの研究を続けます。

主はモーセに言われた。「この民はいつまでわたしを怒らせるのか。わたしが彼らの間で示したすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか。わたしは疫病で彼らを打ち、彼らを嗣業にあずからせず、あなたから彼らよりも偉大で力ある国民を起こそう。」するとモーセは主に言った。「それでは、エジプト人がこれを聞くでしょう。（あなたが御力をもってこの民を彼らのただ中から導き上られたのですから。）そして彼らは、この地の住民にもそれを告げるでしょう。彼らはこう聞いているからです。主よ、あなたがこの民のただ中におられ、主よ、あなたが面と向かってご自身を現しておられ、あなたの雲が彼らの上にとどまり、昼は雲の柱、夜は火の柱で、あなたが彼らの先を行かれる、と。今、もしあなたがこの民を、ひとりの人を打つように一度にみな殺されるなら、あなたの名声を聞いた諸国民はこう言うでしょう。『主は、彼らに誓われた地にこの民を導き入れることができなかつたので、荒野で彼らを殺してしまったのだ。』どうか今、あなたが仰せになったとおりに、わが主の力の大きいなることを現してください。あなたはこう言われました。『主は怒るのに遅く、豊かな恵みを持ち、不義と背きを赦す。しかし、罪ある者を決して無罪とはされず、父祖の咎を子らに、三代、四代にまで及ぼされる。』どうかあなたの大きいなる憐れみに従い、また、あなたがエジプト以来今に至るまでこの民を赦してこられたように、この民の咎をお赦してください。」主は言われた。「あなたの言葉どおり、わたしは赦した。しかし、わたしは生きている。まことに全地は主の栄光で満たされる。なぜなら、エジプトと荒野でわたしが行ったわざを見、わたしの栄光を見たあの者どもが、この十度もわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかつたからだ。まことに、わたしが彼らの先祖に誓って与えると言ったあの地を、彼らは決して見ることはない。わたしを怒らせた者のだれひとりとして、それを見ることはない。ただし、わたしの僕カレブは、別の霊を持ち、わたしに全く従つたので、彼の行ったあの地に彼を導き入れる。彼の子孫はそれを所有する。」民数記 14:11-24